予防鍼灸研究会（SGPAM）

第24回定例会抄録

テーマ： **鍼灸の調整機能**

2026年1月25日

目次

小児はり鍼法の基本技法と応用.....井上悦子2
鍼灸による免疫調節.....塚本紀之2
カッピングによる心身調整機能ー最後の手“刺絡”.....西岡敏子3

小児はり鍼法の基本技法と応用

日本小児はり学会　会長　井上悦子

「小児はり（Shonihari）」は、江戸時代後期より大阪を中心に発展してきた日本伝統鍼灸の鍼法の一つである。昭和中期、大阪の団塊世代は幼少期から学童期に至るまで日常的に小児はりを受療しており、鍼灸専業者にとって小児はりは半日以上を占める主要な施術として広く定着していた。また、東京に伝わった小児はりは、接触鍼として成人にも応用され、対象年齢を超えて展開されてきた。しかし、1960年代以降の国民皆保険制度の導入や核家族化の進行に伴い、小児はりの受療人口は減少し、大阪においてさえ小児はりを十分に学ぶ機会のない鍼灸師が増えてきている状況となった。この状況を憂慮し、2007年4月、日本小児はり学会は「小児はりの普及と研究」を目的として設立され、本年、創立20周年を迎えたが、小児はりが全国的に十分普及しているとは言い難いのが現状である。
ここで、正確な理解のために「小児はり」は「針具を身体に刺入せず、皮膚に接触させる操作を行い、主に子どもを対象として江戸時代後期から西日本を中心に行われてきた鍼法。」と定義し、施術対象の年齢や用いる針具の種別（専用の各種小児針・毫針・鍉鍼・刺絡針等）、皮膚接触の操作方法（接触鍼法、摩擦鍼法、押圧鍼法、振動鍼法など）は限定しないものとする。臨床現場では、夜泣きや便秘を主訴とする乳幼児に対し、小児はりの施術によって、施術直後から表情が穏やかになり、数回の施術で睡眠や排便リズムの安定がみられることをしばしば経験する。その効果は、皮膚刺激による体性―自律神経反射や迷走神経を介した内臓調整作用といった基礎生理学的知見と整合的に理解できる。本研究会では、ブラジルでのセミナーにおいて使用した映像を用いながら、小児はりの基本的な技法と臨床のエピソードについて紹介する。

略歴
1975年　関西学院大学文学部心理学科 卒業
1977年　大阪鍼灸専門学校（現　森ノ宮医療学園専門学校）卒業
1989年　鍼灸OSAKA誌 編集長
2001年　森ノ宮医療学園出版部部長
2012年　森ノ宮医療学園出版部顧問、清友幼稚園園長
2015年　日本小児はり学会会長
2016年　WFAS Tokyo/Tsukuba 2016副会頭
2018年　第46回日本伝統鍼灸学会学術大会会頭
現　在　（一社）日本小児はり学会会長、森ノ宮医療大学客員教授
学校法人八尾聖光学園顧問、森鍼灸院院長

鍼灸による免疫調節

九州看護福祉大・看護福祉学部・鍼灸スポーツ学科教授　塚本紀之

２０２５年度のノーベル生理学・医学賞は、自己免疫疾患やがん、移植免疫などの研究の発展に多大な貢献をされたとして大阪大学特任教授の坂口志文博士ほか２名に授与された。

受賞理由は「末梢性免疫寛容に関する発見」である。報道などを通じて一般的には、「制御性T細胞（regulatory T cell, Treg）」の発見と伝わっている。
免疫系にとって自己と非自己を見分けることが生体を維持するには重要で、これが破綻し自己を攻撃してしまうのが自己免疫疾患である。自己免疫に陥らないように生体には、二重の保険が掛けられており、それが「免疫寛容（トレランス）」である。これには、胸腺でT細胞が生成されるときに自己反応性T細胞が排除される中枢性免疫寛容とこの寛容から漏れ出たT細胞が自己を攻撃しないように抑制する末梢性免疫寛容がある。中枢性免疫寛容は、胸腺において自己反応性T細胞が除かれるという概念で、これが完璧であれば、自己反応性のT細胞は胸腺からは漏れ出ず、自己免疫反応は起こらないはずである。しかしながら、自己免疫疾患は起こってしまう。つまり、中枢性免疫寛容は完璧なシステムではなく、わずかながら自己反応性のT細胞が漏れ出てしまうというのが、最近の考えである。この漏れ出た自己反応性のT細胞を抑制しているのが制御性T細胞だというわけである。
本講演では、厳密に制御されている免疫システムに対して、皮膚刺激のような微弱な生体への入力によりどのような免疫調節が可能なのかについて、我々の研究結果をベースとして提示し、議論したい。

略歴
1990年　明治鍼灸大学鍼灸学部 卒業
1993年　明治鍼灸大学大学院鍼灸学研究科修士課程 修了
1999年　明治鍼灸大学鍼灸学部 助手
1999年　京都大学大学院医学研究科博士課程 修了
2002年　明治鍼灸大学鍼灸学部 専任講師
2012年　九州看護福祉大学看護福祉学部鍼灸スポーツ学科 准教授
2014年　九州看護福祉大学大学院看護福祉学研究科健康支援科学専攻 准教授
2024年　九州看護福祉大学大学院看護福祉学研究科健康支援科学専攻 教授
専門分野　鍼灸学、免疫学、環境・予防医学、衛生学
所属学会　全日本鍼灸学会（認定鍼灸師）、日本生化学会（評議員）
日本未病学会（評議員）、日本衛生学会（衛生学エキスパート）
日本免疫学会、日本分子生物学会、日本温泉気候物理医学会など

カッピングによる心身調整機能ー最後の手“刺絡”

鍼灸治療院よもぎ倶楽部　院長　西岡敏子

カッピング（吸角療法）は人類の歴史とともに世界各地で行われてきた伝統的治療法であり、ドライカッングとウェットカッピングの二種類に分類される。なかでも刺絡を伴うウェットカッピングは、「最後の手」とも言える方法として、心身の調整機能に深く関与してきた。刺絡の心身への調整機能は、臨床経験から見ても驚くべきものがあり、とくに気血の停滞や瘀血を背景とする痼疾（こしつ）、すなわち慢性病において顕著な効果を示すことが多い。単に鍼を打って患者の「気」の回復を待つのではなく、滞った病理的な状態に直接働きかけ、体内に滞留したものを体外へ導くという刺絡の発想は、慢性化した病態に対する重要な治療戦略である。しかしながら刺絡は、血液・体液を扱う侵襲的手技であ

り、患者および術者に一定の身体的負荷と厳密な衛生管理を要するという意味で、「3K＝きつい、汚い、危険」と表現されてきた側面を有する。そのため現代の鍼灸教育や臨床の現場では十分に継承されているとは言い難い状況にある。本報告では、カッピングの歴史および中国古典医学の理論を踏まえつつ、刺絡を用いた具体的な症例と血液分析による所見を提示し、その効果と心身への調整機能について検討し、痼疾や慢性病に対する刺絡の臨床的意義と応用可能性を、改めて明らかにしたい。

略歴

1968年　国立国府台病院附属高等看護学院卒業
1968年　国立国府台病院精神科　看護師
1974年　茨城県立看護専門学校保健助産学科卒業
1974年　茨城県七会村　僻地保健師
1977年　医療法人式場病院　看護師
1981年　国立松戸病院結核・呼吸器科病棟　看護師
1988年　関東鍼灸専門学校卒業
1988年　鍼灸治療院よもぎ倶楽部　院長
1990年　東京医療専門学校鍼灸教員養成科卒業
1990年～2023年　関東鍼灸専門学校講師